



4月からたくさんの学校行事やテストに取り組んで頑張っている3年生。「3年生は大変だとは思っていたけれど、まさかこれほど大変だとは。」そう話した生徒の表情は、なぜかとても明るく、自信が感じられました。さて今回は、さだまさしさんの歌である「風に立つライオン」を通して、よりよく生きていくことについて考えた、道徳の時間の感想を紹介したいと思います。



【資料について】 「風に立つライオン」 作 さだまさし

アフリカの大自然の中の小さな診療所で働く「僕」に、別れた恋人から結婚を告げる手紙が届き、「僕」はさまざまな思いを交錯させる。「風に立つライオン」の主人公にはモデルがいる。宮崎県立日南病院の院長である、柴田紘一郎医師だ。柴田医師は30歳から2年間、ケニアで医療に従事していた。さだまさしさんは、彼のことを歌に書こうと何度も挑戦し、ようやく15年後に完成することができた。

道徳の授業を終えて考えたこと

○夢とは自分がしたいことだから、そのためにできることを自分なりにしていきたい。自分がしたいことだったら、周りも大切だけど、何よりも夢とか目標のために、自分のしたいことを優先する。（1組）

○自分が今、どのような行動をするべきかを考えながら生活したい。また、相手の気持ちに寄り添いながら行動したい。（1組）

○自分が選んだ選択に対して自問自答し続け、選んだ選択を自分の正解にすることが大切だと感じた。自分の夢をかなえるためには思い続けるだけでなく、行動することが大事だと思う。（2組）

○辛いことにも負けず、「自分の夢」のために強い心で粘り強く生きる。夢を想像し、夢を決め、人との関係を築く。今日学んだことを今後に生かしていきたい。今の自分に必要なことは、想像力、決断力、ちょっとした思いやり、言葉遣いの気配りだと思った。（2組）

自分の生き方に正直でありたい。誇りをもって生きていきたい。このような感想も多く書かれていました。

○常に夢に向かう姿勢や、どんなときでも諦めない精神が必要だと思った。夢に向かう第一歩として、目標をもって常に努力して取り組んでいけば、どんな夢でも叶うだろうと思う。（3組）

○自分の夢に自信をもち、やりたいことを全力で楽しむ心が必要である。そして、周りの人に応援されなくても、自分を信じて行動することも必要である。（3組）

○自分らしさを見つけられるような生き方をしたい。最後に満足できるような人生は難しそうだけど、何とか楽しんで生きようと思う。（4組）

○人の役に立てるようなことはできないかもしれないので、せめて、人の役に立とうとしている人を応援しようと思った。柴田さんのような生き方ができる人は、本当に尊敬できるなと感じた。（4組）





● 1952年にマザー・テレサによって設立された「死を待つ人の家」

マザー・テレサ（アグネス・ゴンジャ・ボヤジュ）

テレサの父は、手広く事業を営む地元の名士であった。カトリック教徒であった父母は信仰心に篤く、貧しい人への施しを積極的に行っていたという。彼女は聡明な少女で、12歳の頃には将来インドで修道女として働きたいと考えていた。18歳でアイルランドでロレット修道女会に入り、21歳の時に修練女としてインドのダージリンに行く。そしてカルカッタの聖マリア学院で地理と歴史を教え、34歳の時には校長に任命されている。上流階級の子女の教育にあたりながらも、テレサはいつも貧しい人々のことが気になっていた。2年後、ダージリンに向かう汽車に乗っていた際に、「すべてを捨て、もっとも貧しい人の間で働くように」という啓示を受け、宗派を問わずにすべての貧しい人のために働く生涯を送った。

— — — — — 切 り 取 り — — — — —

※保護者の皆様へ・・・今年度も保護者の皆様からのご意見や感想をお待ちしております。いただいたご意見や感想は、道德通信を通して紹介させていただくこともありますので、ご了承ください。（匿名でもかまいません。）
